

ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エネルギー2021

審査委員長 講評

坂本雄三（東京大学名誉教授）

昨今の「脱炭素化への動き」によって、ZEHは以前よりも一層注目されるようになりました。「ZEH」という名称がまだ存在しない時代から、ZEHの概念を構築し、より優れたZEHを表彰するという方針で始まった本表彰は、将に先見の明があったと言えるでしょう。

今回（2021年度）の感想をまとめます。①応募数は2019年度の264シリーズをピークに、今回は212シリーズですので、頭打ちの状況ですが、これはZEHが「新しいと感じるもの」から「当たり前」の存在に近づいている証と解釈すべきでしょう。②今回の大賞受賞の3社はいずれも2度目の大賞受賞であり、初回の受賞で満足することなく、高断熱化と省エネ化をさらに磨き上げた結果が今回に繋がったわけです。お祝いを申し上げるとともに、彼らの向上心に拍手を送りたいと思います。③坂本委員長賞のエルクホームズ(La Plus)は当社における高いZEH化率（全販売棟数に対するZEH棟数の割合）を評価したものです。

受賞者の皆様、誠におめでとう御座います。

新型コロナウイルスによる感染症拡大が収まらず、対面による表彰式イベントが実現出来なかったことが残念です。

現在、我々は地球環境問題と感染症によるパンデミックという相互に関係はありますが性格の異なる大きな問題に直面しています。更には世界情勢が緊迫しており、より複雑な様相を呈しています。こうした状況を千載一遇のチャンスとして、あらゆる仕組みの見直し、「グレートリセット」ができるかどうかということが問われています。ニューノーマルに適合した住宅を実現していくことが重要になります。今回も省エネルギー性能の高い住宅作品の応募が多数集まりました。脱炭素社会の実現に向けて、優れた住宅供給に取り組んで頂いている住宅事業者の皆様を大変心強く思っています。

今回の秋元賞は「清栄建設」でした。住宅性能の高さは勿論ですが、「Webによるバーチャル展示場」で住宅の断熱工事施工後・完成後の現場を360度カメラで見学できるサービスを展開していることを評価しました。コロナ禍の影響によって住宅展示場での集客が難しい状況下において、一般の住まい手に向けた大変優れた取り組みと思います。次回も皆様からの先進的な取組の応募を期待しています。

審査委員講評

寺尾信子（株式会社 寺尾三上建築事務所 代表取締役）

受賞者の皆様、おめでとうございます。桜満開の時期の対面の表彰式イベントは今年も開催できず残念でしたが、皆様のご努力と成果は応募資料から拝見することができました。それは200余りの応募シリーズ全体のUA値分布やBEI分布のグラフからも一目瞭然です。2050年カーボンニュートラル実現目標においては、徹底した省エネが第一優先、その次に創エネ、であると思います。皆様の応募住宅は今後の脱炭素社会にも大きく貢献するものと考えております。今回の寺尾賞は「チェックハウスMIRAI」とさせて頂きました。外皮および一次エネルギー消費量において優れた性能を有する応募住宅群において、数値評価の難しい分野、のびやかな居住空間やまちなみへの調和の努力を評価させて頂きました。今後も高い省エネ性能を前提として意匠面でも地域に誇れる住宅が数多く登場することを願っております。また2050年カーボンニュートラルの目標に向けてはライフサイクルCO2排出量に配慮した住宅であることもアピールできる要素になると考えています。来年度の皆様の取組みに一層の期待をしております。